リズムの説明の中で「朗読してみる」ことを何度も述べました。本を読むとき音読する人はほとんどいませんが、しかし目で活字を追いながらも人は無意識にリズムを感じとっているのです。そうであれば、書く側がリズムにあわせて書かなければ読者の気分を乱すことになります。詩のような韻文ですと、作者も読者もリズムを明確に意識していますが、実は散文でもリズムが潜在しているということです。リズムのめちゃめちゃな文章は、だから読者を無意識的にイライラさせ、長時間の読書に耐え難くさせる原因ともなりましょう。かといって、文字通り朗読しながら書く人もいないようです。名文章家といわれる人は、頭の中で無意識に朗読しながら書いているわけですね。だから自分の文章に固有のリズムが無意識に出るようになったとき、その人は自らの文体を完成させたのです。その人の文章は、もはや他人が安易に手をつけられない域に達したといえましょう。

(2) 文豪たちの場合

家斉は眼をさました。部屋に薄い陽が射している。六つ（午前六時）を少々過ぎたころだなと思った。このごろは決ってそうなのだ。年齢をとると、だんだん眼が早くさめて困る。（松本清張『かげろう絵図』講談社版「長編小説全集25」）

木曾路はすべて山の中である。あるところは岨づたひに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いてゐた。（島崎藤村『夜明け前』新潮社版「藤村長篇小説叢書」）

長い影を地にひいて、痩馬の手綱を取りながら、彼は黙りこくつて歩いた。大きな汚い風呂敷包みと一緒に、章魚のやうに頭ばかり大きい赤坊をおぶつた彼の妻は、少し跛脚をひきながら三四間も離れてその跡からとぼ〳〵とついて行つた。（有島武郎『カインの末裔』筑摩書房版「現代日本文学全集21」）

私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此処でもたゞ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚かる遠慮といふよりも、其方が私に取つて自然だからである。私は其人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。余所々々しい頭文字抔はとても使ふ気にならない。（夏目漱石『こころ』筑摩書房版「現代文学大系14」）

山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした、其後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出掛けた。背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないが、そんな事はあるまいと医者に云はれた。二三年で出なければ後は心配はいらない、兎に角要心は肝心だからといはれて、それで来た。

三週間以上――我慢出来たら五週間位居たいものだと考へて来た。（志賀直哉『城の崎にて』筑摩書房版「現代日本文学全集20」）

十二月二十五日の午前五時、メイン・トップ・スクウナ型六十五噸の海神丸は、東九州の海岸に臨むK港を出帆した。目的地は其処から約九十海里の、日向寄りの海に散在してゐる二三の島々であつた。島からは、木炭と木材と、それから黒人仲間で五島以上だと云はれる非常に見事な鯣が出る。（野上彌生子『海神丸』講談社版「日本現代文学全集63」）

往古、西域に楼蘭と呼ぶ小さい国があった。楼蘭が東洋史上にその名を現わして来るのは紀元前百二、三十年頃で、その名を史上から消してしまうのは同じく紀元前七十七年であるから、前後僅か五十年程の短い期間、この楼蘭国は東洋の歴史の上に存在していたことになる。いまから二千年程昔のことである。（井上靖『楼蘭』「新潮日本文学44」）

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。（川端康成『伊豆の踊子』河出書房版「日本文学全集18」）

その小男は舷側にもたれ、陸を眺めていた。海はまだ暗かった。波を消された港の水が拡がっていた。ドック、突堤、倉庫、起重機、煙突など、港の水際を形づくる建造物が、さまざまの色と光度の灯火を、飾花のようにつけたまま、次第に輪郭を現わそうとしていた。遠く背景の六甲の山は、茜色に明けかける四月の空に影絵を描き、その襞の文様を次第に現わして行くつもりらしかった。（大岡昇平『酸素』岩波書店「大岡昇平集」第4巻）

子供の泣き声が耳に入つて目が覚めた。眠りが足りないと思うと、私はすべてのことが厭わしい。もう眠れそうもないので、起きて鏡の前に坐つてみた。顔の皮膚は荒れていて、クリイムで拭つても汚れが残つている。朝のうち風呂へ入るといいのだが、今の姉との生活では、私には言い出せない。昨夜姉は風呂を沸かしてくれたのだが、私が帰つたときは大分冷えていた。（伊藤整『火の鳥』筑摩書房版「新選現代日本文学全集15」）

五月中頃の事だ。藤は謝し、躑躅は腐れて、所々の垣根のうちに杜若や芍薬や撫子などがちらほら新緑の鮮と妍を争はうとしてゐるのに、丸で五月雨のやうな、毎日々々仕切なしの雨降で、容易に夏めく景色に成りさうにも見えなかつた。（徳田秋声『春光』筑摩書房版「明治文学全集68」）